

く。ブタタート比丘 (Buddhadāsa Bhikkhu) の活動は、ひとえに宗教的であり、活潑な文筆活動を通しての広範な影響力と共に、まったく別個の視点から評価を加える必要がある。ブタタート比丘は現代における「森林住部」の復活を目指し、静寂な森の中に修道センターを建設して、瞑想と奉仕の生活を送ることすすめている。

最後に仏教と社会主義の問題について付言しておきたい。すでにスリ・ランカやビルマなど、社会主義政権が成立してしまっている諸国では、「仏教社会主義」の提唱などさまざまな形で、社会主義と仏教のあるべき共存の形態についての試行錯誤が行われている。タイ国は、またその必要に迫られてはいないが、東隣のラオス、カンボジアにおける社会主義政権の成立は、タイ国に対しても大きな衝撃であり、やがてタイ仏教もまた何らかの形において、社会主義イデオロギーとの調整を迫られることが予想される。

解深密経疏のチベット訳について

本学教授 稲葉正就

一

解深密経疏は、玄奘訳解深密経に対して西明寺の円測(613～696

A. D.) が撰じた註釈書である。この疏は正大日本統蔵経 (ZZ. 1.34.4～35.1) の中に収録されている。ところが、この疏は全一〇巻よりなるものであったが、異流の書として軽視されたためか、第八巻巻頭と最後の第一〇巻全部とが失われたままで、これらを得るに由ない状態である。

さて、仏教学研究の現段階において、チベット大蔵経の有する役割については議論の余地もないのであるが、その中に、この疏が翻訳され、しかも完全な形態で収録されているのを発見するのである。(大谷影印 No. 5517; 東北 No. 4016)

それではまず、この疏がどのようにしてチベット語に訳されてチベット大蔵経の中に収録されたか。敦煌から数多くの文献が発見されて学界を賑わしたが、その中に曇曠と法成という人の著作が含まれている。前者は、河西の出身と思われるが、長安に至り西明寺で学問したようであり、その後河西に帰り、涼州甘州沙州へ移って七八八年頃まで在世した如くである。かれの思想の中心は円測系の解釈を継承し、生存中は勿論、死後までこれらの地方で学ばれたと思われる(上山大峻「曇曠と敦煌の仏教学」参照——京大人文科学研究所・『東方学報』第三五册所収——)。次に後者の法成は、敦煌文献中に瑜伽論関係の訳著が多いが、この解深密経疏をチベット訳したチョェトupp (Chos grub) と同一人を見做しておそらく誤りないであろう。この疏のチベット訳の奥書に、

吉祥天王の命により、大校修訳官比丘ゴエのチョェトupp (Hgos Chos grub) によって中国の本から訳、閲、判定され

た。

とある。「吉祥天王の命により」というのは、この頃の甘州はチベットの支配下にあつたから吉祥天王とはチベット王であつて、熱烈な護教王チツクデツェン・レーベチェン (Khri gtsug lde brtsan, Ral pa can 在位 815~841 A. D.) を指すのであろうと思われる。次のランダル王 (Glan dar ma 在位 841~846 A. D.) は大薩行を行つたからその前の王でなければならぬからである。レーベチェン王は、法成を大蕃国大徳三蔵法師に任命し甘州修多寺において翻譯に従事させた。梵語原典から未だチベット訳されずに漢訳のみ存在する仏典の中から主として選んで翻譯させて、チベット訳仏典類を充実することに主要な目的があつたように思われる。先に曇曠によつて円測の学説が甘州地方に伝えられ、この説も読まれていたであろうから、それを法成が採りあげて翻譯したということは極めてありうることである。奥書に訳出年代を記していないが、修多寺に住して訳した経論に壬戌(842) 丙寅(846)の年号が記されているから、その前後頃にその寺で訳したと考えられる。修多寺という名称も *sutra* の寺という意味で仏典の翻譯道場であつたことを示すものであろう。(上山大峻「大蕃国大徳三蔵法師沙門法成の研究(上)」一五三頁参照——京大人文科学研究所・『東方学報』第三八冊所収——)

二

このように法成のチベット訳が完全に現存している今日、第一にわれわれに要請されることは、散逸部分の解説であり、できう

れば原文に最も近いものに復原することである。そこで訳文を検討すると、例えば

会釈 *go shin bcaid pa* 悟解者 *go shin rtogs pa*

と訳されているが、それは一見して明らかな如く漢語の逐字的直訳である。したがつて法成の訳文から円測の原文に復原することができるわけである。ところが漢文は語彙が豊富で同義異語が多く、例えば「曰」「云」「言」「謂」などがあつて、どれが用いられていたかわからないので、原文に一字一句違わない完全な復原は不可能である。しかし原文に極めて近い漢訳は可能である。

ここに注意しなければならないことは、法成は時たま支婁訳解深密經を無視して梵文蔵訳本(大谷影印 No. 774; 東北 No. 106)に従つていることがある。また瑜伽論よりの引用文をチベット訳するのに梵文蔵訳本(大谷影印 Nos. 536~5343; 東北 Nos. 4035~4042)のそれと極めて近く、語の訳や文章の順序も非常によく似ている。法成は敦煌でしきりに瑜伽論を講義した事実と関係あるように思われる。また円測がときどき引用する成唯識論中の唯識三十頌の本偈に対しても支婁訳を無視して梵文蔵訳本(大谷影印 No. 556; 東北 No. 4055)の偈を出していることがしばしばある。以上の三つからの引用文に対する法成訳は梵文蔵訳を参照しているから必ずしも漢訳からの直訳でないことを注意しなければならぬ。

また更に注意を要することは、法成の漢文の読み方が拙かったり誤ったり、あるいは引用文の終りを間違えたりしていることである。敦煌の仏教学研究には多少そういう傾向がみられる。以上

の諸点を注意しながら、わたくしは長年月の努力の末、復原をようやく完成した。(稲葉正就「円測・解深密経疏散逸部分の漢文訳」参照——『大谷大学研究年報』第二四集所収——)

三

この疏の漢文原本第一巻の最初からチベット訳と比較対照して行くと、比較的初めの部分にある所詮宗(頭所依為を説明する箇所(金陵刻経処本第一巻二四右~二八右)と、それに対するチベット訳(No. 5517, XXXIX, 24b, 1行目~40a 3行目)とは著しく相違する。一見して漢本は非常に短い、チベット訳には漢本にない非常に長い説明が多く見られる。先ず、チベット訳のみに「八万四千法門」について極めて詳細な説明がある。この説明は果して円測が書いたものであろうかという疑問が当然生じるであらう。それについて、同じ円測が著作した仁王経疏(T. No. 1708, 33: 384a)を繙くと、

言八万四千者……(略)……広如深密記……(略)……。

とある。ここに深密記というのは、この解深密経疏のことと見做してよいであらうから、このチベット訳のみに存する説明を指していると理解できるであらう。そうすると、却ってチベット訳の方が円測の撰述当初のものをあらわしているということができよう。このように比較対照していくと、チベット訳の方がよいという証明を、このほか二・三あげることができるが、ここには省略する。とにかく、第一巻のチベット訳のみの示す文章は、非常に authentic なもので、現存漢本のこの部分はそれに比べると断

片的なものに過ぎないと思われる。これは何故にそうなったのか。おそらく第一巻のこの部分は最も破損が甚だしく、誰かが断片を少しつなぎ合せて一応の現存漢本としたものと推測できるようである。したがって第一巻は、現存漢本を見ている限りでは完本のように見えるけれども、実際は比較的長い文章が処々失したものである。わたくしは、この部分の復原と研究を、機会を得れば発表したいと考えている。

次に、散逸した第八巻の巻頭とは、経の地波羅蜜多品の註釈の最初の部分である。チベット訳より復原すると、この品を積するに三門分別する。すなわち、

一、積三品名義 (この部分全部欠)

二、弁三品来意 (殆んど欠)

三、依三文正積 (現存)

とあったが、従来は前の二門が全然わからなかった。おそらく巻頭がちぎれて失われてしまったのであろう。(前掲稲葉漢文訳参照)

さて、散逸した第一〇巻も、いまやチベット訳からの復原によってその内容を知ることができる。第一〇巻とは、経の最後の如来所作事品の中の言音差別の相を説くところより以下、最後までに対する註釈である。すなわちこの品の註釈の大部分を占めるものであって、九巻しかない現存漢本では、この品に対する円測の論述は殆んど窺うことができないから、チベット訳は貴重な存在である。そこで、第一〇巻を復原していくと、円測はこの品を大別して法身化身受用身の三身に約して解釈していることがわか

る。この考え方が適切であるかどうかを他の註釈を参照して考察してみよう。先ず、解深密経の註釈で中国撰述のものとしては、この疏以外はすべて失われていることは周知の通りである。ただたまたまこの経の大部分が瑜伽論に引用されているのに対して、遁倫が瑜伽論記の中に註釈を施しているが、この経に対する註釈が目的ではないから、甚だ簡略である。そこでわれわれには、内容が整い、手にし易いものとしてわが徳龍講師の解深密経講讀(日本大藏経方等部章疏六に所収)によるべきであろう。講師はとどころに倫記を引用してられるが、しかし円測の第一〇巻を知らなかったからそれを利用することはできなかった。ところが幸なことには、如来成所作事品の中、言音差別の相の前までの最初の部分は円測の第九卷末に収められているので、徳龍講師は円測の三身に約する説を知っていた。それにもかかわらず、講師は法身と化身の二身に約して解釈し、

明三受用身二科意難し領。(二五五頁)

といって円測の説を採らない。それでは、円測の説と徳龍講師の説とどちらがよいかという問題が生じる。それについて、チベット大藏経を繙くと、無着・聖解深密経解説(大谷影印 No. 5481; 東北 No. 388)があるが甚だ簡略であって詳しく知ることはできないから、これは除外するとして、更にもう一つ詳細な註釈として、聖解深密経解説(大谷影印 No. 5845; 東北 No. 4358)が見出される。東北のみに Byan chub rdsu jhprui という著者名があげられているが、どういふ人かわからない。この書は大藏経の雜部の中のチベット撰述の個所に収められているから、著者はチ

ベット人かと考えられる。とにかく、この註釈書によると、如来成所作事品を分類して、

一、因円満

二、果円満

三、作事円満

(1) 如来の生起

(2) 身の示現

(3) 言音

(4) 心生起

(5) 所行

(6) 境界

(7) 現等覺

(8) 転法輪

(9) 大般涅槃

(10) 如来を見聞奉持して善根を生起

とする。因円満と果円満が法身を示す。円測も徳龍講師も経のその部分が法身を明すとするから、みな同じである。ところが、円測は、如来の生起から言音までの三が化身の相を明すとなし、心生起から最後までを受用身の相を明すとす。徳龍講師はその説を採らず、如来の生起より最後までの一〇全部が化身を示すとす。そこで前掲のチベット撰述らしい註釈書を見ると、

「心生起」とは、法身の加被より生起した二種の色身心が、先に方便と智慧を修習加行して変化の如く無加行に生起することを説くのである。(東北通帙三〇八:177a)

とあるから、心生起以下は受用身变化身の二身を示すと見做している。しかし実際には受用心に約しての註釈が殆んど見当らないようである。それでは、どの註釈が正しいのであろうか。それについてチベットの註釈書は、如来の生起から最後までの一〇に対して、それぞれに華嚴經の如来出現品に相当する独立した経より引用して解説している。そうすると華嚴經と相違する点は所行と境界とが逆になっているだけで、全く一致する。この一致は偶然ではなく、この如来成所作事品が華嚴經によって成立したものであるということに気付かしめられる。そこで華嚴經如来出現品を見ると、法身と化身の二身に約するのが適切であろうと思うのである。初期の唯識思想をあらわす解深密經としても簡明に考えた方がよいのではなからうか。そうすると円測の第一〇巻は、せっかく努力して復原しても、その内容が余り適切なものではないということになる。しかしながら、円測と徳龍とチベットの註釈書との三つが、それぞれ相異してそれぞれの特色をもっている点に興味を惹かれるものがあるであらう。

四

レーバチェン王の命によって、この疏が法成によって訳され、チベットへ伝えられチベット大蔵經の中へ収録された。そしてそれがチベットにおける仏教学研究に多少の影響を与えることになった。

チベットにおける偉大な仏教改革者として知られるツォンカバ

(Tsoni kha pa : 1357~1419) の全書の中、

末那と阿頼耶識に関する難解処の広註「善説大海」(大谷影印 No. 6149) ; 大谷チベット文献 No. 10124 ; 東北 No. 5414) という書があつて、興味あることは、九識説について述べ、それが円測のこの疏によつていふことである。また、ツォンカバ全書の中に、

了義未了義決択論「善説心髓」(大谷影印 No. 6142 ; 大谷チベット文献 No. 10103 ; 東北 No. 5396)

という著作がある。これは解深密經の三時教判にはじまり、その三性説を批判し、中觀学派の立場に及んで述べているが、その間しばしば円測のこの疏にしたがつていふという。(長尾雅人「西藏に残れる唯識学」——印度学仏教学研究第二卷一号所収——)

以上要するに、中国やわが国で円測系唯識説は異端視され振わなかつた。ところが、河西の曇曠は長安の西明寺で学び円測系唯識の学者となつて帰国し敦煌方面にその学を伝えた。ついで法成が出て、その地方で読まれていた円測のこの疏をチベット王の命によつてチベット語に訳する大事業を完成した。その翻訳はチベットへ伝えられてチベット大蔵經に収録された。後にチベットにおいて唯識学研究の参考とされた。また、わが国に伝わつた漢本の散逸部分を、このチベット訳によつて大略復原することができた。法成のチベット訳が果たした役割には大なるものがあるといえよう。